

リチャード・ライト

いであぜ今日は!

古川博巳+絹笠清二[訳]



彩流社

訳者略歴

古川 博巳（ふるかわ ひろみ）

1927年、奈良市に生まれる。神戸市外国語大学・英米学科中退。神戸商科大学・京都女子大学・天理大学教授を歴任し1998年に定年退職。1954年〈黒人研究の会〉創設に参画し前代表。現在同会顧問、天理大学国際文化学部・非常勤講師。

〈著書〉『黒人文学入門』（創元社）、『アフロ・アメリカ文学の研究』（京都女子大学研究叢書）、『ブラックへの旅路』1、2（せせらぎ出版）など。

〈訳書〉詩集『L. ヒューズ 片道きつぷ』（国文社）、Ch. アチュベ『崩れゆく絆』（門土社）、M. L. キング『黒人はなぜ待てないか』（共訳・みすず書房）など。

絹笠 清二（きぬがさ せいじ）

1932年、神戸市に生まれる。関西学院大学・経済学部卒業、神戸市外国語大学・大学院修士課程修了。神戸市立高等学校教諭、校長、教育委員会指導主事、総合教育センター研修課長などを歴任。1993年退職後は大阪工業大学嘱託講師、94年より聖和大学短期大学部教授。

〈著書〉『易しい国際理解』（山口書店）、『アメリカ文学の読み方』（大阪教育図書株式会社）など。

ひでえぜ^{きょう} 今日は、

2000年10月30日 発行

定価は、カバーに表示してあります

著 者	リチャード・ライト
訳 者	古 川 博 巳 絹 笠 清 二
発行者	竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話 03 (3234) 5931 FAX 03 (3234) 5932

<http://www.sairyuusha.co.jp>

e-mail:sairyuusha@mtg.biglobe.ne.jp

組版 野 ば ら 社

印刷 ㈱平河工業社

製本 ㈱青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-88202-682-1 C0097

Loud Today!

いであぜ今日は!



市川博巳・絹笠清二 [原]

Richard Wright

もくじ

一部 日常茶飯事^{ありきたり}

5

二部 栗鼠^{リス}かご

175

三部 ねずみ横丁

299

訳者あとがき——解説にかえて

349

凡例

* 1、* 2……は人名・事件・事項に関する訳注で、各部ごとの終わりにアラビア数字の順にまとめて記述。

「」は行文中に挿入の解説的訳注で、理解の助けになると思われる記述。

へは誌紙・書名以外に、原文中イタリック体で表記されている部分。主人公の独りごととか、実際に口に出していない意識の流れる箇所に該当。

本文中に組み込まれたラジオ放送部分は、前後一行空けて頭部は数コマさげた8ポイント活字のレイアウトになっている。

訳文中のゴチック（太字）活字体部分は、原文では英字太文字綴りとイタリックの箇所とがある。

「クロンボ」は、本来は差別語、niggerの訳語であるが、訳文中では黒人のあいだでの「^{けな}貶し」言葉として用いている。

第一部

日常^あ茶^り飯^き事^た

……一面のサルガッソーの大海原——なけば目醒めた感情の大きなうねりに押しやられる無意識な人生の、とてつもない逆巻き……

ヴァン・ウイック・ブルックス『アメリカ成^{*}年期に達す』₁

ラジオをお聞きのみなさん、担当はジャック・バセットノ

こちらはシカゴ・トリビューン広場、WGN局。次のお知らせは中部標準時、八時ちょうどです。……チーンノ ……ネバストッブ時計会社が謹んでお知らせいたしましたノ

窓の外を御覧くださいノ 街角に、ビルの入口のま上に、誇らしく、ゆったりはためいているものを。何かお分りでしょうか？ 朝風に美しくひるがえる星条旗を御覧になると、胸がおどるではありませんか？

親愛なる皆さん、偉大な一人のアメリカ人、わが祖国を救い、何百の同胞に自由の恵みを与えてくれた人物を祝福して、わが国旗が、今日、高らかにはためているのですノ

今日、二月十二日はエイブラハム・リンカンの生誕日ですノ

この日にあたり、シカゴ大学・史学科主任のウエザースプーン教授が、皆さんにリンカの時代背景と、彼の輝かしい生涯についてお話されます。では、ウエザースプーン教授どうぞノ ア……ノ ア……ノ みなさん、おはようございますノ

1

いくら目を凝らしても、首を伸ばしても、階段のてっぺんは見えなかった。しかし誰かが呼んでいるので、彼は昇らねばならなかった。へうん、すぐに昇っていくよ。今すぐに！と彼は叫んだ。そして彼は階段を昇り始めた。こんな階段を昇るのは大変なことだった。あえぎながら昇っていくと膨脝ふくらばきが痛んだ。立ち止まってどこが階段のてっぺんか見きわめようとしたが、ただもう果てしなく続いていった。彼は歩幅をひろげて一度に三、四段ずつ昇りながら、へちえっ！なにもこんなにくっちゃん、急ぐことではないんだ！と思った。すると突然、その階段がまるで大きな酒樽がころがっているか、長い丸太が水中でくるりくるり回っているかのような変てこな気がした。彼はその上に乗って必死に足踏みしているのだが、あの声は相変わらず呼び続けていた。彼はうんざりして、また立ち止まった。へ畜生、この階段には終りがまったくないんだ！おれは時間を無駄にしているだけだ！全然昇っていないじゃないか！それにあの上のほうにいるくそったれ野郎め、まるでおれのボスの声みたいに聞こえるぞ！

ジェイクは身じろぎして、さらに深く頭を枕に埋めた。彼はため息をつき、唾を飲み込み、膝をみぞおちに向けて折り曲げると、まばゆい陽射しから顔をそむけた。

まぶしい金色の光のもやの中で階段は燃えてゆらめき、今にも消えてしまいそうだった。それからまた、しっかりと実体のあるものになった。彼は相変わらず走り続けながらへあの野郎、まだ呼び続けてやる。いったい奴は何の用があるってんだ?」と思った。彼はまた大声でどなった。へ頼むから、怒らんでくれよ。今すぐ行くから!」今度は何マイルもある階段を、ひとつ跳びに昇って行ったが、それでもってぺんが見えてこなかった。へいったい、どうなってるんだ? どうもからかわれているようだぞ! 畜生、こ憎らしい声め!」彼は立ち止まってため息をつき、額の汗を拭ってから、どれくらい階段を駆けあがったかを見きわめようとした。ところが出発点とまったく同じ所にいるのだった! 彼はかぶりを振りながら、へうむ、あれほど走ったというのに徒労だなんて……そうだ、こいつは何かトリックがあるぞ」とつぶやいた。しかし例の男、あのボスのような声をした野郎は、まだ彼を呼んでいた。

ジェイクは寝返りをうって腹ばいになった。右肘を折り曲げてその上に頭を載せた。左腕を脇腹にぴたり添わせ、薄汚い掌は上向きのままにしていた。まるで甘くて溶ろける菓子でも舐めているかのよう、唇の先をチュンと鳴らした。

階段は果てしなく上へ延びていた。今度は息つく間もなく、一度に五段ずつ駆けあがった。心底からこみあげる心地よい喜びが四肢にみなぎるようだった。この調子で行けばすぐにも頂上に着きそうだった。どんな階段でも、どこかにてっぺんがあるはずだ。へすぐ行くぞ! すぐ行くぞ!」と声を張りあげた。突然、例の声が耳いっぱいにグワンと響いてきたので、彼は立ち止まり、何を言っているのか聞きとろうとした。

ジェイクはうなされながら夢から覚めると、片肘をついて上体を支えた。どよんとしたまなこが陽光にまばたいた。半開きの唇から低いうめき声を洩らして、ずり落ちたシーツを滑稽な手つきでまさぐっ

た。いく度か唾を飲み込むと、まるで紐に繋がれたおもちゃの猿がやるように、喉仏が顎から首筋にかけ、ふくれたり、へこんだりした。目は腫れぼくうずき、涙が出ていた。うるんだ目に、ベッドと化粧台と絨毯と壁がぼやけたり、ずれたりしながら、ひとつに溶け合って映った。腰がだるく疲れきった感じがしていた。目をつむって、〈おれはいつたの夢を見ていたんだろう？〉と反芻^{はんすう}してみた。彼は今にも何かに取りかかろうとし、それも、とてつもなく楽しいことにありつきそうだったが、頭のなかは空白が出来たようで、思い出せなかった。ところが例の相手は、相変わらず呼んでいた。

……リンカンの先驅者のギャリソン^{*2}は、神聖なる大義に魂を燃やした人物でした。味方の忠告も、敵方の警告も退けて、奴隸制と抑圧に反対する立場に立つことを、公然と宣言したのでした……

〈畜生ノ、あのラジオに起こされたんだノ〉延々と続く階段がおぼろげに蘇ってきた。へはて、おれは何の夢を見ていたんだろう？ どうしても思い出さねばならない、とても大切なことのように思われた。目をすくめて見ようとしたが、例の夢の階段は映画のシーンがゆっくり暗転するように、猥とした暗闇の中に吸い込まれてしまった。彼は太急ぎでどこかへ行くところだった。渴望しながら何かを求めていた。しかし、もうちょっとで手が届きそうになるたびに、ほとんど自分のものになりかけるたびに、誰かが呼び戻した。

……私は大真面目です。——言葉をにごすつもりはありません。——言い訳をするつもりありません。——たとえ一インチたりとも後退するつもりありません。——私の言うことは聞いてもらわなければ……

ジエイクは口をひんまげた。シーツの下からまっ黒な片方の足を投げ出してうなった。部屋の空気は淀んでいた。髪の毛はさきにくつついた油脂の小さな塊が、暖気のせいであちあちと落ちていた。腕をあげて、黒檀色の首筋を這うぬめぬめした細い油汁をひっ搔いた。苦虫を嚙みつぶしたような顔つきで、口を大きく開けてがなりつけた。

「リル／＼」

「なあに？」

「そのドアを閉めろ／＼」

「なによ？」

「そのドアを閉めろと言ったんだ／＼」

ドアのボタンと閉まる音が聞こえた。へあのアマめ／＼ ドアなんぞ開けっぱなしで、何でおれを起こしやがったんだ？／＼ もう一度横になると、さっきの気分が蘇ってきた。彼はなま暖かい女の肌に向かって、腰に力を入れている場面を想像してみた。横隔膜の筋肉がピンと張るたびに、彼はゆっくり呼吸をした。熱いところけそうな塊が、みぞおちあたりでほてっているように感じられた。うつむきかげんになると、糊の効いた枕カバーに唇が触れた。両足をみぞおちまで引きつけるように折り曲げた。女の温かい体がびったり寄り添って自分を抱きしめ、血を暖めてくれているような気がした。へ牛乳屋さん／＼ 牛乳屋さん／＼ 彼は飛び起きた。へこん畜生／＼ 万事休すだった。もうこれ以上、惰眠をむさばれなかった。六インチばかり開いた窓の隙間から、自動車のけたたましいエンジン音が飛び込んできた。座り直すと、薄織のカーテンを通して斜めに射し込む日の光と目が遭遇した。へちえっ、もう朝だったのか？／＼ 彼は首をほぐし、寝覚めの苦い味の唾を飲み込もうとした。顔をゆがめて、もう一度やって

みた。へぐぐッ／＼ いかんな／＼ どうしても唾が飲み込めなかった。もう一度横になると、頭が何か薄っぺらいものの端っこに当たった。手でまさぐると、小さな黄色の冊子が出てきた。『ユニティー』と彼は声に出して読んだ。信者の救いに役立つ雑誌とある。白い織布で体をおおった、髭もじゃの男のまわりに後光が射している写真が目に入った。日夜をわかつた、イエスは我が心を満たし給うと書かれていた。へどうしてリルは、こんなくだらん物をベッドに持ち込むんだ？ その本を部屋の隅に投げつけると、軽い音をたててページがめくれた。

彼は立ちあがったが、眠気のせいか少しばかり目くらみがした。唇を舐めて、手の甲で目をこすった。あくびをすると二列の金歯が光った。大きなあくびだった。口がだんだん大きく開いた。さらに、もっと大きくなり、へイヤ／＼アア／＼と河馬のようなうなり声を発すると、ゆっくりと閉じた。頭を後にそらせ、体に力を入れてしゃんと立つと、憐愍^{れんぴん}を誘うかのように目が潤んだ。へちえっ、どうもしゃきっとせんぜ 大きく息を吸い込むと、鼻の奥がむずかゆかった。とたんに、くさめが出た。

「ハ……ハッ……ハクシヨン／＼」

体が前かがみになっていた。上体をもとに戻して、赤と金色模様のパジャマの袖で鼻と目頭を拭いてうなった。

「ちえっ、畜生……」

喉が乾いて口の中がいがらっぽかった。唇を舐めて、そのいやな味をとり除こうとして、再び唾を飲み込んだ。けだるさだけでなく、空腹の不快感も手伝って、いっそう気分がすぐれなかった。胃の中の黒いどぶ鼠が、そこいらじゅうを囓りまわっているような空腹感を覚えた。パッケイジから煙草を一本抜き取ると、マッチをすった。指がぶるぶる震えたので焰がゆれて消えた。へ神経がまったく参ってやるな と思った。煙草に火がつくと、目を細めゆっくり手をあばらから腰の方へと這わせ、へそのま

わりや両太腿の内側を搔いた。もう少し、ほんのもう少しだけ眠りたかった。しかし、そんなことが出来ないことは分かっていた。へどうしてリルは、あのドアを開けっぱなしにしてたんだ？ 朝っぱらからどうしてラジオをつけたりしたんだ？ 腹が立って、かっかしたが、コーヒーの沸く匂いと、ベークンのジュージューと焼ける匂いで気分が治まった。一息つく、カーテンへ、それから陽射しの方へ、それから絨毯の赤い花模様へと、別に当てもなく視線を移しながら見まわした。その視線が貨車仕訳表の小箱に、何百枚という小さな白いカードを積みあげた後にある、蜂の巣状の木製ケースの上でぴたりと止まった。へやーれやれ、ここんところの一ヵ月ほど、あの貨車仕訳表で、お遊びをやってるってもんじゃないぜ。それにだ、あと二週間ほどで、階上へ呼び出されてテストに受からなきゃならんのだ。そう考えただけで気が重くなった。彼はその貨車仕訳表を覚えなければならなかった。一つひとつのカードで郵便がいつ、何処に行き、どの列車に載せるかを覚えなければならなかった。へどれどれ、六時過ぎり、シカゴとエバンス行き。十五号は二番線と。日曜は運休と。あれはイリノイ州パリス行きと。それから九時三十分シカゴとエバンス行き。九号二番線。さてと、あれは土曜日以外だったな。それから十時四十五分のやつはと。そうだ、あれはダンヴィルとケイロ行き。百三十一号は一番線だった。あれは何処経由だったかな…… 彼は眉をしかめ、目を細めて唇を噛んだ。へあのダンヴィルとカーボンデイルは何処へ入れるんだったかな？ へ どうしてもそれが思い出せなかった。こんな暗唱用の小さい白いカードが九百枚もあった。よーし、彼は朝食をすませてから少し勉強しようと思った。たらふく食べば頭だって爽やかになり、よく回転するだろう。

彼は夢心地でのっそり洗面所へ向かったが、ずんぐりした黒い足は絨毯の上でコブラの頭のようにふらついた。蛇口をひねって洗面器に水を入れてから、鏡はどこかなと見まわした。へあのアマめ、あいつときたら、どうしてまともなことが出来ないんだ？ あいつがいるかぎり、欲しいものがすぐ見つかる

ったためしがないんだノ」 うつむいて蛇口から水を受けると手にあふれる水をごくりと飲みくでした。
「うーん、だいぶすっきりしたぞ」 背を伸ばして鏡の前に立った。そこに写った顔は満月のようにまん丸で、暗闇のようにまっ黒だった。まっ黒な油ぎった顔の中ほどに、ずるそうな二つの目があり、その下には腫れぼったい下まぶたが垂れていた。幅広い小鼻がずんぐりとあぐらをかき、二つの鼻孔は猟銃の銃口のように前向きにふてぶてしく、ぽっかり開いていた。分厚い唇は湿り気を帯びてだらしく弛み、歩くたびにぶるんと揺れた。首のまわりはぶよぶよの脂肪の塊が、うねりをなして顎を支えていた。しょぼくれて、縮れた頬髭が両側のこめかみに這いつくばっていた。

彼は髪に指先をつつこんで痒い頭を掻いた。指にねばっこい、べとべとの油がくっついたままだった。顎をぐいと突きだして伸びてきた剛毛に触れた。散髪をし、髭もあたる必要があった。うんざりだった。へちえっ、どうして散髪で一時間も無駄にしなげばならんのだ？ それに髭も毎日そらなきゃならんんだ？ コップと髭剃用のブラシをとり出して、湯の方の栓をひねった。湯気が立ち昇って胸と顔がほかほかした。へヒュー、いい感じだノ」 コーヒーの香りとジュージュー焼けるペーコンの匂いが強くなってきた。ぼつぼつ眠気が覚めてきた。頭がやっと回転しだした。

頭をしゃんと立てると、彼は顎から一インチほどのところで白く泡立つ髭剃ブラシをとめた。リルが台所で誰かに話しかけているのが聞こえた。身体をかがめて聞き耳をたてた。へいったい、あのアマめ、いつも何を話すことがあるんだろう？ ぜひとも知っておきたいもんだ。それに、あいつを今どなりつけるのも得策だとは思えんし。そうだ、あの女めは、近いうちに思い知らせない限り、いつまでもくだらんことを止めんだらうな。そのうえ、よその奴らとあんなに馴々しく立ち話をするなんて、まともな女のことじゃない。そんなこと、自分でも分かってやがるくせにノ」 ジェイクは髭剃用のコップを下に置くと、急いで洗面所のドアに近づき、鍵穴に耳をくっつけ、聞き耳をたてた。へまだ喋ってや

がる。それに笑ってもいやがるぜ。いったい何をしてやがるんだ？ あ的女め、何と違ってやがるんだ？ ピクニックのつもりなのか？ ブラシを手荒く置くと、ドアを押し開けて踏み込んだ。

彼が台所へ入った瞬間、リルは頭をのけぞらせて笑い声をあげ、肩を小刻みに揺らせていた。しかしジェイクを見ると、急にとりすました顔になった。牛乳屋はあわてて掛け鞆を取りあげた。

「おはようさん」と牛乳屋が声をかけた。

ジェイクはそれに答えず、部屋のもん中まで来ると両足を開いてすくと立った。

「あんた、もう起きてたの？」 リルはこわばった口調で聞いた。

ジェイクは口許をひんまげて、頭を左右に振った。「いんや、おれはまだ寝ているぜ」 リルは皿拭き用の布巾を手にし、もともとピカピカに光っているストーブの金具の部分を磨き始めた。牛乳屋は手探りでドアの把手をつかんだ。

「さてと、仕事に出かけることにするか」と牛乳屋は言った。

「明日もう一本クリームを追加するのを忘れないでね」とリルが頼んだ。

「あいよ」と答え、牛乳屋が姿を消した。

ジェイクはどっかと椅子に腰を掛け、眉をよせて床を見つめた。リルは冷蔵庫から玉子のパックケースを取り出した。彼女は今にも殴られるのではないかと、唇を噛んで上体をこわばらせていた。

「リル？」 その声には、いつもの不気味な兆しがこもっていた。

彼女はインチばかり頭をすくめて、フライパンを調理ストーブの上に置いた。ガスに火をつけながら、その顔はまるで何も聞こえなかったと言わんばかりに、とりすましていた。ときどき、こんなふうにして相手の機先を制したこともあった。

「リル」 声に怒りがこもり始めていた。

「聞いてるわ、ジェイク」彼女は宥^{なだ}めるような口調で言った。

「じゃあ、それらしくしろ！」

彼女はフライパンに玉子を割って落した。ジェイクが歩くと、まるで爪先までが彼女に腹を立てているかのように、リノリウムの床がキュツ、キュツと鳴った。

「おい、おれはまだおまえに話があるんだぞ！」

彼女は玉子に塩を振りかけた。

「何が気に食わんのだ？」

「べつに何もないわ」

「おれの言うことが聞こえんのか？」

「いいえ、あんたの言うことは聞いてるわよ、ジェイク」

「じゃ、いったい何でそれらしい態度をしないんだ？」

彼女は二つ目の玉子を割った。白味のはねがフライパンの端にくっついて、ゆっくりと固まった。ジェイクは椅子から立ちあがった。

「おまえの耳は塞がってるのか？」

「いいえ、そんなことないわ、よく聞こえてるわ」

「そこんところが知リたかったんだ」と彼は言った。「もしおまえの耳が塞がっていて、聞こえないんなら、これから先しっかり聞こえるよう、治してやることだって出来るぜ」

彼の顔が六インチのところまで迫っていた。

「いったい全体、おまえがああ牛乳屋と一日中喋^{いちんちやう}りたくなるような、どんな面^{めん}があいつにあるんだ——そこんところが知りたいぜ！」